ロックからフォークまで多彩
カナダのポップ・ミュージック

この国特有の静かで控え目なやり方ではあるが、カナダはアメリカ大陸のポピュラー音楽に相当の貢献をしてきた。カナダの音楽家たちは、めったに派手なことをしたり、カナダ色を前面に押し出すことこそしないが、常に世界に向けて歌いかつ演奏している。

アン・マレーのラブ・ソングやゴードン・ライトフットのバラードは世界にこだまし、オスカー・ピーターソンの弾くピアノの絶妙なテクニックやジョニ・ミッチェルの浮き浮きするようなダンス曲にしびれるファンも多い。またボブ・ディランのバックをつとめるためトロントを離れたザ・バンドは、史上最高のロック・バンドのひとつとしてその地位を確立するに至った。そしてカナダと米国のカントリー・ミュージックの「栄誉の殿堂」には、カントリー・ミュージックの元祖の一人として、カナダ人ハンク・スノーの名が刻まれている。

英語圏カナダのポピュラー音楽界にスターが登場しはじめたのは、一九二〇年代から三〇年代にかけて全国的に普及したラジオやレコードが、広い国土に散らばるカナダ人の心を少しずつ結びつけ始めた頃である。当時のエンターテイメントのスタイルは、その頃のカナダ社会の空気を反映したもので、英国やヨーロッパの伝統が色濃い面もあると同時に、一方では米国で盛んになりつつあったビッグ・バンド、ボードビル、カントリー（当時はヒルビリーと呼ばれた）などの新しいタイプのエンターテイメントの影響も強かった。ミュージック・ホールはジャズを聞く聴衆でぎっしりうずまり、各地の舞台でミンストレル・ショーがくり広げられた。

しかしカナダのポピュラー音楽が真の広がりと深まりを見せたのは、ロックンロールの熱狂が北米を襲ってからだ。ロックはまたたくまにカナダ全土を包みこんだ。高校という高校にはロック・バンドが結成され、地元のヒーローもラジオから流れるロックに決して引けを取らなかった。ロックンロールの衝撃は、単にロックそのものの生き生きとしたバイタリティーにだけあるのではない。ロックの登場により、自分たちにも曲を作って歌うことができると信じた若者が、雨後のたけのこのようにいっせいに現われたのだ。そのことだけで、カナダのポピュラー音楽の様相は一変してしまった。

新たな動きはフォーク・ソングにも見られた。ロックほど荒っぽくなく、また感情的でもないフォーク・ソングは、より知的満足感を与えてくれた。何千人ものカナダの若者たちが、ギターやバンジョーを手にし、三部合唱で妖精の女王や勇敢な騎士のことを歌ったり、またある時は社会の不公正を訴えた。ジョニ・ミッチェル、ゴードン・ライトフット、イアン・アンド・シルビアといった若手の熱心なフォーク歌手の歌が全国の喫茶店で聞かれるようになったのもこの頃である。

一九六〇年代半ばまでに、いろいろな変化がめまぐるしく起きた。高校のバンドとしてスタートしたグループがプロになったり、他人のものまねから出発した演奏家たちがそれぞれ独自のスタイルを築いたりもした。そしてカナダ生まれの新しい曲がカナダ人の共感を呼ぶようになった。ライトフットは"Early Morning Rain"や"Ribbon of Darkness"、そして雄壮な"Canadian Railroad Trilogy"などの曲のなかで、広大な土地と不気味なばかりの沈黙に対してカナダ人が抱いている畏怖と愛着の念を見事に歌い上げたし、イアン・タイソンはフォークとカントリーを融合させて、西部流れ者の歌を上品に仕上げた"Summer Wages"、"Four Strong Winds"、"Someday Soon"などを世に送った。これらが刺激となって、より多くのカナダの若者がはっきりとカナダ的な立場から作曲をし、歌を歌いはじめた。このような時代の要望に正面からこたえたのがブルース・コバーンやマレー・マクロクラン、デービッド・ウィフェンであり、またのちに米国ばかりでなく世界中で大成功を収めたニール・ヤングであった。彼らに続いて、ダン・ヒルやバルディも登場した。

一方、ロック・バンドはカナダの到るところでクラブやコンサートに出演するようになっていた。またカール・パーキンスやエルビス・プレスリーと同世代のアメリカ人ロカビリー歌手、ロニー・ホーキンスは一九五〇年代にトロントに移り住み、自ら経営するヨング・ストリートのナイトクラブでロックンロール・バンドのいわば学校のようなものを開き、多くのバンドを育てた。なかでも群を抜いていたバンド、ザ・ホークスは、ボブ・ディランのバックをつとめたのち、ザ・バンドという名で独立した。ホーキンスが育てたもうひとつのバンドは、ジャニス・ジョプリンのバックをつとめ、まさ